



社団法人

海外と文化を交流する会

(社) 海外と文化を交流する会会報

2012年1月発行 (4ヵ月1回発行)

第49号

”知と心”の繋がりに文化の原点を求めて

●日本を理解し日本で学ぶ留学生への支援 ●貧しい国々での医療活動を支援

●各国大使館との協力などによる文化講演会の主催

特集：オーストラリア・ハウスと越後妻有

■越後妻有ってなんだ？

中野真逸郎 (社)海外と文化を交流する会常務理事



<越後妻有・えちごつまり>

伝統的な日本の段々畑。棚田（たなだ）である。千枚田ともいう。下の写真は越後妻有の光景だ。傾斜がきつく耕作地が狭いところに、田んぼが段となって作られている。美し

い棚田と点在する茅葺屋根の農家、急峻な山々が多い日本の、まさに原風景である。

日本の北から南まで、ほとんど各地にこの棚田が存在する。

「こしひかり」もこういった棚田でもつくられている。

新幹線「越後湯沢」からほくほく線に乗り換えて走ると、六日町をすぎ十日町にはいる。十日町は南魚沼と隣接し、「こしひかり」が有名だ。ほくほく線は十日町駅を出ると、いきなりトンネルにはいる。車中も暗くなり、天井に星座やキャラクターが映しだされる。初めて観るとびっくりする。

次の「松代」・まつだい駅だけはトンネルを抜けるが、越後妻有（えちごつまり）を走るほくほく線はこのあともトンネルを走る。十日町市の北部を横断しているのだ。

越後妻有とは、新潟県南部にあり、長野県との県境にある——千曲川が信濃川と名前を変えたあたり——自然と人間が共に暮らす「里山」が今も残る地域である。ほぼ 760 平方キロメートル、東京 23 区よりも広い十日町市と津南町からなるこの地域は、古くから「妻有郷」と呼ばれた。

2005 年に合併で新「十日町市」が誕生した。川西エリア、松代エリア、松之山エリア、中里エリア、十日町エリアとわかれる。津南町と合わせ越後妻有地域と呼んでいる。

人口 5 万人以上が住む地域では、世界一雪が降るといわれている豪雪地帯である。1 年のうち 4 か月は雪に覆われる。ひと冬の降雪は 10m を超え、積雪は 3m 近くにまでなる。

厳冬のためばかりではないが、過疎高齢化がすすむ。

過疎化がすすむと耕作放棄の棚田がふえる。そんな棚田には葎が生えている。葎はアシ（悪し）といい、ヨシ（良し）とも読み替えられる。耕作放棄は過疎高齢化の象徴だ。けしてヨシとしない、アシである。

<越後妻有のとりのくみ>

過疎化がすすむのは、日本各地でみられる現象である。過疎化がすすめば、地域は荒れる。どうすればいいのか。

新潟県では「ニューにいがた里創プラン」が制定された。1994 年に十日町地域が地域指定を受け、越後妻有では、各地域が連携し活性化を目指した。1996 年に「越後妻有アートネックレス整備構想」ができあがり、1997 年に「大地の芸術祭実行委員会」が設立された。なぜ芸術か。

越後妻有には縄文式土器の、深鉢形土器で「火焰型土器」が発掘された。信濃川流域で多数発掘されている。燃え上がる炎をかたどったような形状。装飾性豊かな、土器である。土器はひとつとが多く存在し、農耕がおこなわれていた証しである。

ひとが多く住むところに、自然とのつきあいがあるべきだ。

「人間は自然に内包される」を理念に、越後妻有地域 760 平方キロメートルの広大な土地を美術館に見立て、アーティストと地域住民とが協働する。地域に根ざした作品を制作、継続的な地域展望を拓く活動を目的とする。そして生まれた「大地の芸術祭」である。大地の芸術祭は「交流人口の増加」「地域の情報発信」「地域の活性化」を主要目的としたアートプロジェクトである。

2000 年に第 1 回「大地の芸術祭」越後妻有アートトリエンナーレ 2000 が開催され、以後、3 年に 1 回開催されるトリエンナーレ形式を採用している。2012 年には第 5 回トリエンナーレが開催される。7 月 29 日（日）～ 9 月 17 日（月・祝）までの 51 日間。このときはバスを仕立てたりして、どっとひとが繰り出すはずだ。

アートは約 300 点が越後妻有に点在する。ひとの交流は、オーストラリアほか世界各地のアーティスト、地域住民、このプロジェクトに共感して来訪するひとびとのあいだに広まる。

このプロジェクトを推進するのは、NPO 法人越後妻有里山協働機構。魅力ある地域にしていくことを目的として、地域内外の有志によって設立された。「大地の芸術祭」によって地域・世代・ジャンルを超えたネットワークを育み、越後妻有の未来につなげることで、第1に、住民がいきいきと暮らすこと、第2に、地域の働く場所が増えること、第3に、価値観や境遇の異なる人々が共存できる地域にしていくことを目標にしている。

<へびと、こへび>

その目標のシンボルマークとして「へび」がいる。

「へび」は神聖な生き物、守り神であり、脱皮しながら大きくなっていく。そのへびに越後妻有の6市町村を重ね、「脱皮しながら力を合せて大きくなっていこう」という願いを込めた。

越後妻有は脱皮しつつあるのである。

この「大地の芸術祭」には、都会の若者が数多くボランティアとして参加してきた。「自分たちが楽しいから」参加している。いわば「ボランティア」である。ボランティアは、時間やお金に余裕がある人がする活動というイメージだったが、それとはちょっとちがうかもしれない、と「こへび隊」が生まれた。

こへび隊は、大学生、社会人やシニア世代など、幅広い年齢層から組織され、さまざまな活動をサポートする。芸術祭の運営、日々の作品メンテナンス、ツアーのガイド、除雪作業や農作業……「都市で・何をやっているかわからない・学生」も、関わっていると「楽しくて、楽しくて」なのである。

だが、若者たちは「過疎地の・農業をやってきた・お年寄り」との出会いで衝突、困惑から理解、協働へと変化した。かれらは脱皮していき、地域はかれらによって変化している。

こうした協働の過程でわかってきたのは、妻有は都市に住むサポーターたちにとって、かけがえのない「希望をつくりだす場所」ともなった。

<越後妻有と豪州そしてオーストラリア・ハウス>

いっぽう、「自然とアート」を愛する豪州のアーティストたちは、2000年に開催された第1回大地の芸術祭から、越後妻有と深く関わってきた。その拠点として「オーストラリア・ハウス」がある。

「希望をつくりだす場所」「大地とアート」にふさわしいという理由で、オーストラリア・ハウスが2009年トリエンナーレ以来、越後妻有にオープンした。オーストラリアのアートの紹介と日豪交流をおこなう場所として、100年以上経つ日本の古民家が、再生され、活動がつづく。

豪州について上越には、悲しい経験がある。日本としても、悲しいことだった。

第二次世界大戦中、直江津捕虜収容所（正式名：東京俘虜収容所第四分所）が上越の直江津にあった。そこには多くのオーストラリア兵が収容され、60名のオーストラリア人捕虜が死亡した。1945年の終戦ののち、捕虜虐待などの罪で当時の日本人警備員8名が死刑になった。

「そんな悲しい事実を通して、戦争がいかに残酷で理不尽なものであるかということ、次世代に身近な歴史として語り継ぎたい」理念で、捕虜収容所跡地が平和記念公園としてよみがえった。1994年、「直江津捕虜収容所の平和友好記念像を建てる会」が設立。翌年には式典がおこなわれ、以後、建てる会の解散そして上越日豪協会設立となった。越後妻有が活性化にむけて動き出したのと同時期である。

オーストラリア・ハウス建設にも、上越日豪協会、里山機構、地域のひとたちが協働した。

しかし2011年3月、オーストラリア・ハウスには大雪が屋根に積もっていた。長野県境を震源として大地震が発生した。雪の重みと大きな揺れに耐えきれず、倒壊。せつかくのオーストラリア・ハウスだからと、再建計画がもちあがった。

越後妻有はしたたかである。これをアートトリエンナーレ2012の「オーストラリア・ハウス」設計提案を公募とした。世界中からの提案である。このコンペで最優秀作に選ばれたのは、オーストラリアの若い建築家アンドリュー・バーンズ氏。審査委員長は、世界で活躍、評価されている安藤忠雄氏。下記のような設計である。2012「大地の芸術祭」開催までに竣工させる。現地にいけば、みられるはずだ。

越後妻有は各層が重なり合って、交流し、脱皮し、新しい社会を築き上げていっている。



最優秀作の作品 © Andrew Burns Architect

■海外と文化を交流する会とオーストラリアのつながり

大谷俊介 (社)海外と文化を交流する会会長

今から35年も前になります。1976年に日豪友好協定が結ばれた機会に、「海外と文化を交流する会」は創設者の故・松岡朝女史を中心として苦勞に苦勞を重ね以下のことを成し遂げたのです。それは今ではとてもできないことですが、経歴も流派も違う日本画

の巨匠 25 人を説得して、これから進展する日豪交流のために、日本人の心を表す日本が誇る芸術品である日本画を一人一点ずつ描いてもらい、それをオーストラリア国民にプレゼントしたのです。これは日本では未成熟であるボランティア活動の中で特筆すべき大事業として我々も誇りに思っています。

この友好協定は、「日本・オーストラリア・関係・合意協定」の頭文字を並べ、国際的にも有名な日本の古都奈良の名を引用し「NARA 条約」と呼ばれ、オーストラリアにとって建国以来はじめて結んだ外国との協定であり、大きな期待を抱かせるものでありました。従来の英国志向の外交をアジアに向けようと、その最初のパートナーに日本を選んだのでした。

実際、この協定のおかげで、旧日本軍の残虐非道の行いによりオーストラリア国民に定着していた反日感情もずいぶんと柔らぎ、両国民の親密な交流も増え、今では世界で最も日本語学習熱の高い国となりました。加えて、今は中国に抜かれはしましたが、オーストラリアにとって日本は最大の輸出国となり経済復興の促進に大きく貢献しました。資源のない日本にとってもオーストラリアは石炭や金属鉱石などの天然資源を供給してくれる大切な国となり、車やコンピュータなどの先端工業製品を大量に買ってくれる良き貿易相手になったのです。

このように盛んになった日豪交流のきっかけを私たちの会が日本文化の紹介を通して行ったことは少々自慢してもよいでしょう。しかし、振り返ってみればあれから 35 年の間にいろいろなことがありました。当初は、我々もうかつでしたが、アフターケアとして日本画の美しさやその伝統などをオーストラリアの人たちに知ってもらおう努力を怠ったため、今や国宝級とも言えるこの寄贈日本画の価値を判ってもらえず、展示すべきメルボルンの国立美術館から消え失せ、一時行方不明になったりしたのです。それが、現地の領事館の人たちの協力でメルボルン港の埠頭近くの港湾事務所の倉庫に眠っていることが判りひと安心したのでした。そして、友好協定から 30 周年を記念して 2006 年に日本とオーストラリアの交流の再確認の行事が大々的に開かれた時に、その末尾を飾る大イベントとしてめでたくこの日本画の展覧会を再び開くことができたのです。

これらの話はこの会報でもしばしばとり上げられたので、ここに再び詳しく紹介することは差し控えます。我々としても、この過去に成し遂げた大事業やその美談を遺産としていつまでもそれにすがりつくことは情けないので、そろそろそれから脱却して何とか新しい展開を作っていきたいと考えているところです。

ところで想うところ「海外と文化を交流する会」が対象とする主な相手国がオーストラリアであることは、何となく良い選択ではないでしょうか。芸術、文化面で輝かしい伝統に満ちたヨーロッパ諸国、あるいは新しい国ではありながらも広大な領域で幅広い展開が日夜産み出されているアメリカ、そして、日本文化の源流の多くが存在している中国や韓国を交流相手とするのとはずいぶんと雰囲気が違うように思います。また、南米、アフリカ、東南アジア、中東諸国にもそれぞれ独自の立派な文化があるはずですが、それらに関する知識が薄いのでここでは考えないことにします。

いずれにしてもオーストラリアは国家としてはアメリカよりずっと新しく、立派な文化を育ててきたアボリジニなどの先住民を別にすれば、歴史の中にももちろんルネッサンスなどはなく、いわゆる中世をもたない国です。そして、国民の半分近くが言葉も習慣も違う

200 ぐらいの国から移民して出来上がった国なのです。当初こそ白豪主義という排他的な感情が多くのアングロ・サクソン人に見られましたが、今や多民族国家の度合が強くなりすぎたので、その結果、もはやどの民族が主役なのか判然としなくなりました。文化や習慣においてアメリカなどに見られる移民の自国への同化を強く求めることはせず、それぞれの価値観の多様性を尊重しながら、多文化主義社会を造っていかうとしているようです。これは、いろいろな違いをもつ材料を切り碎いて統一された味のひとつのスープを作る（アメリカ流）のではなく、むしろ多様な味を活かしながら混ぜ合わせるサラダ作りに似ているところからオーストラリアは「サラダ・ボウル型社会」になりつつあると言われているのです。

このことだけでも大雑把に言えば単一に近い民族社会で深いけれども単純な伝統を育ててきた日本とは文化や感情面でずいぶん違う国民性が芽生えてきているのでしょう。そういう人たちと文化交流するのはそれだけでも興味深いことにちがいません。

というわけで「海外と文化を交流する会」はオーストラリアとの交流を続けることを重要とし、その二幕目のテーマをどうするかを考えはじめています。ところが、日本画寄贈という過去の遺産は重く、しかも、2006 日本・オーストラリア年で開いたそれらの展覧会とそれに付随した催しが大成功だったため、再びこの日本画を展示するイベントを開きたいとヴィクトリア州政府が言い出したのです。それは、メルボルンから西へ 300Km 行ったところにある羊毛業で栄えたハミルトンという小さい街の美術館が創立 50 周年を迎え、それを記念して日本画展を開きたい、ついてはそれに我々の会にも協力してほしいと言うのです。もちろん、これを断るわけにもいかないの、我々としてはできる限りの協力をするつもりです。そして、単純な展覧会だけでなく、この際二幕目のさきがけになるように少し間口を広げ、日本文化の少しの形の違う側面を紹介するイベントを企画しようかという話になったのです。これはこの会報のあとの記事で少し紹介することにします。

こんな話が出てきた中で、2011 年 3 月 11 日に東北地方の太平洋岸で大地震が発生しました。同時に福島、宮城の原子力発電所が機能不全となる大事故が起こったのです。そして、3月12日には福島の発電所が大規模な水素爆発を起し悲惨な結果をまき散らしました。ちょうどその頃、長野北部から越後地方にかけて大地震が発生したのです。これにより越後妻有地方で展開されはじめた国際的な芸術の里にある「オーストラリア・ハウス」という、オーストラリアの芸術家が住み込みながら作品を制作する拠点として改装された古民家が全壊してしまったのです。

この芸術の里で展開されている活動は本当にユニークなものでいち度訪ねてみることをおすすめします。日本が世界に誇るアートディレクターの北川フラムさん（彼は生粋の日本人ですが、父君が洒落た人なのでしょう。ノルウェイの探検家アムンセンが人類初の南極点到達の時使った船の名がフラム号、それを引用して名付けられたとのこと。Fram はノルウェイ語で「前進」という意味だそうです）が仕掛人です。この里にある全壊した「オーストラリア・ハウス」は 2012 年夏までに再建されることが期待されていました。そして、多方面に支援を呼びかけていることを知った我々の会では、毎年開いているチャリティ・コンサートの収益金をオーストラリアとの交流活動のひとつとして、2011 年はまことにささやかな貧者の一灯ですが、この再建のために捧げることにしたのです。そして、この当会からの支援は世界に先駆けて行われたため、寄付金はわずかではありますがニュースと

して大きくとり上げられたのです。そして、実際に下のような話がありました。

2011年10月28日に代官山で開かれた「大地の芸術祭、越後妻有アートトリエンナーレ2012」の企画発表会には当会常務理事のギッシュさんと私も招待されました。この会合には多くの人たちが集まり賑やかに行われました。今年7月末から約2ヶ月にわたって3年に1回開かれるこの国際的な芸術祭には40ヶ国から約250作品が参加する盛大な催しとして多くの期待を集めています。

企画発表会では、冒頭にブルース・ミラー駐日オーストラリア大使が達者な日本語で挨拶をしました。その最初の部分でいきなり「海外と文化を交流する会」の名を揚げてオーストラリア・ハウスの再建への協力に対して篤く謝辞を述べたのには少し面映ゆい思いでした。北川フラムさんを中心とするこのトリエンナーレでの企画の紹介のあとのなごやかなレセプションでは、妻有地区の山里の味を沢山盛り込んだ料理の数々、地元の魚沼産コシヒカリで作った香り高い日本酒が振舞われ、我々出席者一同は大いに満足したのです。

このトリエンナーレの数多い出品の中で最大の目玉商品のひとつは、その時に新装の出来たてホヤホヤのオーストラリア・ハウスで行われる芸術活動ではないでしょうか。二幕目を迎えた海外と文化を交流する会のオーストラリアとの文化交流は、このオーストラリア・ハウスで展開される芸術活動を支援することをひとつの柱としようではありませんか。

下の写真は私が2011年8月に妻有地区を訪ねた時に撮ったものです。右側には現地の芸術の里での活動を仕切っているNPO法人の事務局長の関口正洋さん、左は上越日豪協会会長の近藤芳一さん。そのうしろに3月の大地震により倒壊した旧オーストラリア・ハウスの残骸が見えます。古い木造民家ですが、前日に豪雪が屋根に降り積もり大地震の揺れでひとたまりもなく崩れ落ちたのです。



■ 「大地の芸術祭」越後妻有アートトリエンナーレが 作り出す新たな接点

——「海外と文化を交流する会」と「都市農村交流推進センター」——

鮫島宗明 (社)海外と文化を交流する会常務理事
NPO 法人 都市農村交流推進センター理事長

「開国」を嫌う日本農業

私は農林水産省の研究機関に長くいましたので、仕事柄、日本の農林水産業の抱える問題には継続的に関心を持ち続けてきました。現在は、TPP 参加を巡り、関税を撤廃したら日本の農林水産業（特に農業）はだめになってしまうとの論議が盛んですが、農業サイドからの同様の危機はこれまでも何度か叫ばれてきました。

1985 年のプラザ合意後の輸入農産物価格の低下（円高の進行）、アメリカからの牛肉・オレンジ関税引き下げの圧力、それに引き続いて、サクランボの輸入解禁を要請された際も、強い懸念が示されました。

その後も、1992 年から 1993 年にかけて、ガット・ウルグアイ・ラウンド交渉の場で、「例外なき関税化」が謳われましたが、このときは、「ついに聖域のコメも関税化されるのか」との強い危機感が生まれ、市場開放に理解を示した当時の細川総理を模した藁人形に五寸釘を打つ抗議行動が、全国各地の農協で繰り広げられました。「コメは一粒たりとも入れず」とのスローガンが叫ばれたことをご記憶の方も多いと思います。

私は、当時も今も日本の農業がそれほど弱いとは考えていません。消費者は国産農畜産物愛用志向が強いですし、農家の資金力と知識は他の先進国に引けを取りません。そして、何よりも農業生産に不可欠な淡水資源に恵まれています。問題なのは、わざと農業の競争力を失わせるような制度的な要因を放置していることです。長々と論ずる気はありませんが、二つの制度的な問題点だけ指摘しておきます。

一つは、農業後継者の参入システムが機能していないことですし、第二は、農地の公共財的側面が無視されていることです。担い手の高齢化は今に始まったことではありませんが、世襲以外は原則として参入を認めないのでは高齢化の流れを止めるのは不可能でしょう（現在、高齢化率 60%以上）。第二の点に関しては、農地は公共的な生産装置として扱われているということです。農地では固定資産税や、相続税の減免措置が取られており、土地改良事業などの公共事業では、農家の負担率は 5%と低く抑えられていますが、これらは農地の公共財としての側面を重視している証です。しかし現実には、農地を単に個人資産として保有し、生産の用に供さなくても罰則はありません。40 年も前から規模拡大が進まない、利用権の集積が進まないことが問題視されていますが、いまだに「所有と利用」の関係が整理されていないのが実情です。

農村資源利活用研究会の設立

今から 25 年ほど前、農業の担い手の高齢化と、耕作放棄地の拡大が問題になった時期がありました。1987 年にリゾート法が制定された時期に当たります。

バブルの発生を予兆させたこの法律で、全国の農山村にゴルフ場とスキー場、リゾートホテルの建設が、雨後の筍のように計画され、風光明媚な漁村にはマリーナの建設が提案

されました。内需拡大策としてのリゾート振興は、当時の状況（日本人の年間労働時間が2000時間を超えていることも問題視されていた時期です）からすればある種の合理性はありましたが、私が気になったのは、計画実行に際し、大規模な農地転用が前提となっていたことでした。他産業と比較して農業の生産性が低いからと言って、生産装置としての農地をむやみに削減しても大丈夫なのか、現在生産の用に供されていないからと言って、潜在生産力まで低下させても良いのだろうかとの心配でした。

1987年から、農林水産省が食料自給率の計算法を生産額ベースから供給熱量(カロリー)ベースに切り替え、50%を割り込みそうだとの情報を流し始めたことも微妙に影響しているとは思いますが、周りを見回すと同様の心配をしている人が少なからずいることに気づきました。

細かい経緯は省略しますが、この心配派を募り、私たちが「農村資源利活用研究会」を任意団体として立ち上げたのが1991年1月のことでした。C.W.ニコルさんや玉村豊男さんと知り合ったのもこの会がきっかけです。豪州のタスマニアのように牧場をそのままゴルフ場として使う計画や、不採算の果樹園に少し手を入れてオートキャンプ場として使う計画、オランダ並みの滞在型市民農園の計画などを作りました。地目変更せずに農地のままで、どこまで規制緩和が出来るかが課題でしたが、時期尚早だったようです。農林水産省からは30年早いと言われました。当時すでに、減反と耕作放棄地合わせて（当時は遊休農地として計算していましたが）100万㌦を超えていましたから、本来なら、何らかの手を打たなければならなかったはずですが。

NPO法人都市農村交流推進センターの発足

それから20年がたちました。問題は何も解決されていません。耕作放棄地と減反の水田（生産調整用水田と言います）を合わせると日本の農地全体の約3分の1が使われていないのが現状です。食料自給率が40%を割り込んだと大騒ぎしていますが、外から見れば、何とも鷹揚な農地利用です。

それでも小泉総理時代に、農地の利用規制が少し緩和されたことは評価されてしかるべきでしょう。参入規制の緩和や、所有権と利用権の分離など、基本問題は残されていますが、少なくとも、農地のままで「滞在型市民農園」が整備出来るようになり、条件付ですが、企業の農業参入等も可能になりました。せつかく環境が変わりつつあるのだから、もう一度、耕作放棄地（遊休農地）対策に取り組もうということ、私たち昔の仲間が再結集し、2007年9月、NPO法人「都市農村交流推進センター」を立ち上げました。

農業体験イベントの実施、滞在型市民農園整備の提案、会員のための市民農園確保などをしてきましたが、2011年は、そこに、福島原発事故による放射能汚染対策が加わりました。農村活性化のための国の事業も徐々に増えていますので、「地方の元気再生事業」や「バイオマスタウン構想」に参加する機会も広がっています。しかしながら、それで都市農村交流の十分な成果が上がっているかと問われると、はなはだ心もとないものがあります。

「大地の芸術祭」との出会い

国の予算のキーワードは、ふるさと回帰、シルバー援農隊、地方の物産展、農業の6次産業化、バイオマス利用の推進など、一見多様な展開を見せているようですが、若い人達はあまり魅力を感じないようです。苦し紛れの予算立て、「事業のための事業」の実態が

露見しているのでしょうか。違った発想はないものかと思い悩んでいた時に、海外と文化を交流する会の御縁で、越後妻有を訪問する機会を得ました。きっかけは、オーストラリアハウスの再建計画を知るためだったのですが、大谷氏や中野氏の報告にある通り、そこではまことにユニークな地域活性化の取り組みが展開されていました。「こへび隊」の名のもとに多くのボランティアが参加し、「大地の芸術祭」を媒体として都市農村交流が実現していました。一過性の芸術祭が多い中で、10年以上も続いている自然を巻き込んだ芸術祭は越後妻有だけでしょう。伝統的な祭りや、札幌の雪まつりと違うのは、見に行くことよりも参加することが重視されている点です。

いい年をしてみっともないのですが、私にとって目からうろこが落ちる思いでした。現場を案内して下さった飛田晶子さんは、こへび隊メンバーとして芸術祭の手伝いをしてるうちに、地域の人・文化・自然とかがかわる交流の魅力にひきこまれ、東京での仕事を辞めて、NPO法人越後妻有里山交流機構への就職を決意したそうです。田舎に飛び込んだ娘の身を案じて事情を見に来たご両親は、妻有での、地域・世代・ジャンルを超えた交流の実態を知り、東京の仕事を辞めた理由がよく判ると納得してお帰りになったそうです。「大地の芸術祭」を核とした都市農村交流、地域活性化の試みは、北川フラムさんを中心とする里山交流機構メンバーの壮大な構想力と、ち密な計画、地域への愛情と尊敬が織りなされて実現したものだと思います。十日町市、津南町の自治体としての決断も先見の明に満ちたものでした。

「海外と文化を交流する会」と「都市農村交流推進センター」との接点

遅ればせながら、私のNPOも参加のきっかけをつかみたいと思いました。ついこの間12月初旬に、中野氏や、岡田氏と妻有を訪問した際、空いている古民家があれば見せてほしいとお願いしました。あいにくの雨でしたが、里山機構の関口さんや飛田さんが、すぐ使えそうな古民家を何軒か案内してくれました。

特に最後にご紹介をいただいた古民家は痛みも少なく、ちょっとした改造で使えそうでした。6畳間が3部屋あるので、7~8人は宿泊可能です。すぐ上に小学校の廃校を改築した「三省ハウス」という名の交流・宿泊センターがあり、外部の者も利用できるレストランがあります（もちろん酒も飲めます）。車で3分ほどのところには松之山温泉もあり、条件が整っています。お伺いしたところ、ほかに利用予定はなく、使用時に1日1万円払えば利用可能とのことなので本年夏の「越後妻有アートトリエンナーレ2012」開催期間中の利用を予約しました。

責任は、NPO都市農村交流推進センターで持ちますが、上記の様ないきさつで確保した「古民家」ですから、海外と文化を交流する会の皆様にも、大いに利用していただければと思います。大地の芸術祭の目玉の一つとしてオーストラリア・ハウス竣工式典も開催されるはずですから、第1号寄付者の「交流する会」も当然参加することになるでしょう。

ここ数年、私がかかわってきた「海外と文化を交流する会」と「都市農村交流推進センター」が、こんな形で接点を持つとは予想していませんでした。

これも、つらい思いをしている東北地方の被災者たちの祈りが生んだ、小さな光明かもしれません。

長くなりましたが、今年の夏の妻有での交流を期待しています。

お知らせ & 報告

■豪州ハミルトンでの日本画展とシンポジウム

大谷俊介 (社)海外と文化を交流する会会長

今年2012年の5月頃にヴィクトリア州の西にあるハミルトンという街にある美術館で創立50周年を記念して、我々の会・海外と文化を交流する会が寄贈した日本画25点の展覧会を開きたいので、協力してほしいとの希望が寄せられた。そして、併せて日本画のことを説明し啓蒙するシンポジウムを企画してくれないか、とハミルトン美術館長は言うのだ。ただし、場所は提供するが企画の立案から運営全般はそちらの資金調達でお願いしたい、との要望である。

我々の会としては、そろそろ会の活動の中でこの日本画関連のイベントを比重を減らしていきたいと考えていたところなので、この申し入れには少し困惑した。しかし、民間レベルで国際的な文化交流を推進していくボランティア活動は、今後もますます重要性が増すであろう。そこで理事の人たちと相談してこの申し入れを受諾することにした。そして、いろいろな企画案を考えた結果、シンポジウムの主題を「日本画」のみに限るのではなく、参加可能な人材を選び講師としてその人たちにいろいろな日本文化の側面を紹介してもらおうという少し間口を広げた「日本文化紹介シンポジウム」とすることにした。

今回ここに示すのは、この日本文化紹介シンポジウムの開催に資金助成を国際交流基金に申請した際に、私が個人的に作文した（でっち上げたと言っても良い）シンポジウムのプログラムと講演者のプロフィールである。「個人的な作文」とは私の個人的好みが強くと強く反映されているという意味でもある。

日本画およびアニメなど関連文化に関するシンポジウム

2012年5月、於オーストラリア、ハミルトンとメルボルン

1. シンポジウムの内容（案）

1) 日本画の特徴——北條正庸氏

日本画と西洋画との違い、日本画固有の精神と芸術性の高さをアピールする。また、アボリジニ民族画との比較などを示し、日本画発展の歴史を紹介するとともに、日本画作成における独自の技法などを実演付きで説明する。講師は多摩美術大学教授で創画会会員。イタリア、オランダなどで日本画紹介の講師を務めた経験がある。2006日本・オーストラリア交流年における日本画展でも日本画の啓蒙講演を行い、大好評であった。これをワークショップに展開したいと考えている。

2) 越後妻有、大地の芸術祭の里での活動——北川フラム氏

ユニークさと規模で世界最高最大のアートトリエンナーレ（次回は2012年7月）の内容を示す。中でも2012年夏に新装の日豪芸術交流拠点「オーストラリア・ハウス」で

の活動を詳しく紹介する。講師はこのトリエンナーレの総合ディレクターであり女子美術大学教授。日本最高のアートディレクターとして国内外の美術展を多数プロデュース。世界各国から芸術文化勲章を受賞。

3) 日本ではじまり育ったアニメ文化————松谷孝征氏

日本画がその原型とも言われるアニメは日本が世界に誇る現代文化のひとつである。その歴史および現状と将来について話をする。いくつかのアニメの映写も行う。講師は手塚プロ社長で、アニメ文化の推進に現場の指導者の立場から大きく貢献した。また、世界各国で日本のアニメの紹介活動を行っている。

4) 日本の農村、漁村文化および被災地の現状など————鮫島宗明氏

日本の美は農村、漁村の庶民の生活の中でも大きく育った。その実例のいくつかを示すとともに民芸運動についても紹介する。また、地震、津波、原発事故の被災地の現状を示し、その中にあっても庶民の美意識は健全、旺盛であることを紹介する。講師は農水産業および食の安全性などに関するプロ好みの政策通として知られた元衆議院議員で、現在日本大学と帝京平成大学教授。都市農村交流推進センター理事長。もともとは植物光合成に関する研究者。有志を募って福島被災地の救援隊長として活躍。

5) その他

a. 外国人が見た日本文化、長年の宣教師活動を通して——ジョージ・ギッシュ氏

講師は青山学院大学名誉教授で、この題材の話と、他の講演の通訳も行う。また、平家琵琶の研究と演奏家としても知られ、シンポジウムでは実演も行う。

b. 日本画寄贈の経緯など————大谷俊介氏

35年前のオーストラリア（そのあとニュージーランドにも）への日本画寄贈の経緯について紹介する。講師は電気通信大学名誉教授。しばらく前まで英国オックスフォード大学の外国人訪問教授も長年務めた。

このシンポジウムの企画は前述のように、ハミルトン美術館長のマクオワン氏から日本画展に併設して啓蒙シンポジウムを開催してほしいとの強い要望があり、それに応える形で考え出されたものである。まだ原案の域ではあるが、このように間口が広がった「日本文化紹介シンポジウム」となりそうなので、折角なのでハミルトンだけではなく在留日本人も多勢いて、領事館もある大都市メルボルンでもこのシンポジウムを開いたら良いとして、現在領事館スタッフの人たちともこれから案を詰めようとしている。そもそもハミルトンという街はメルボルンの西約 300km にあり、19 世紀中頃から羊毛業で栄えたという。アングロサクソン人が開拓のため入植したての頃は先住民と壮絶な戦いがあり、多くのアボリジニの人たちが虐殺された悲しい歴史を持つ。今は平和でかつ今なお自ら世界のウール都市、Wool Capital of the World と主張する羊毛業の盛んなところのようだが、実体は人口が一万人にも満たない田舎町のような。ここで立派な講師陣による日本文化に関するシンポジウムを気合を入れて開いてもどれぐらいの聴衆、観客が集まるのか大いに心配なので、理事の人たちと相談して、このシンポジウムをメルボルンでも開こうではないかという話になったのである。

2. 期待される聴衆

ハミルトンには小さい街ながらもいくつかの中学校と高校があり、100 人規模の小さいカレッジが 3、4 校あるとのこと。一方、メルボルンはオーストラリアで一番の文化都市

で、日本文化学科をもつメルボルン大学を含め、いくつかの大きな（芸術）大学があり、オーストラリアの誇る国立美術館が市の中心部にある。また、大きな組織の現地日本人会も活動している。したがって聴衆としてはハミルトンでは学生たちを主体とし、メルボルンでは一般市民と学生に加え、美術館の学芸員と現地日本人が多く集まることを期待している。

国際交流基金への助成申請はこの春にその採否の結果が判るとのことなので、しばらく静観することにした。もし、助成金が与えられることになったら、その額に応じて具体化を考えることになるが、そうなったら相当忙しいことになりそうである。その時には会員諸姉諸兄のご協力を強くお願いすることになるであろう。

■青盛のぼるチャリティーコンサートのお知らせ

今春の海外と文化を交流する会チャリティーコンサートは、下記のように開催いたします。

出演：青盛のぼる（ソプラノ）
西山昌子（ヴァイオリン）
藤森いづみ（オルガン／ピアノ）

演目：＜ソプラノ＞

アヴェ・マリア（カッチーニ）
歌に生き、愛に生き 歌劇「トスカ」より（プッチーニ）
懐かしい木陰よ 歌劇「セルセ」より（ヘンデル）
我を救い給え 「レクイエム」より（ヴェルディ）
わが母の教えたまいし歌（ドヴォルザーク） 他

＜ヴァイオリン／オルガン＞

アヴェ・マリア（バッハ／グノー） 他

日時：2012年3月30日（金）開場 5:45 開演 6:30

会場：霊南坂教会（港区赤坂1-14-3）

会費：一般前売 3,500円（当日 4,000円） 大学生 2,000円

青盛のぼるさんはミラノを本拠地として世界で活躍中のオペラ歌手。2011年秋からは「蝶々夫人」のヨーロッパツアー公演。どの劇場も大盛況で喜ばれ、新聞クリティックも賛辞の言葉を述べています。2012年夏にはスイス音楽祭で「ナブッコ」に出演予定。「海外と文化を交流する会」での今回のコンサートは5回目となります。また、ヴァイオリンの西山昌子さん、オルガン／ピアノの藤森いづみさんが協演いたします。

昨年3月に起こった震災に心を寄せ、被災地の皆様に思いを馳せた選曲をいたしました。また、地震で倒壊したオーストラリア・ハウスと当会は深いご縁があり、このコンサートは越後妻有に2012年7月完成予定のオーストラリア・ハウスを支援する目的として開催されるものです。

どうぞ皆さま、奮っておいでください。

お問い合わせ、ご予約：社団法人海外と文化を交流する会

Tel & Fax : 03-3370-6786 (午後6～9時・田口)

ご予約について、郵便振替「(社)海外と文化を交流する会 00130-2-366249」
にお名前とご住所を明記くださればチケットをお届けします。

■青盛のぼるチャリティーコンサートのチラシ

青盛のぼるチャリティーコンサートのチラシがあります。ご入用の方、また、多数ご希望の方はチケット申し込みと同様、田口朋子までご一報ください。

E-mail:lala87@nifty.com、電話&FAX：03-3370-6786。

■寄付のご報告

渡辺いつ子様から10万円のご寄付を頂戴いたしました。深く感謝申し上げます。

■「つどい」企画

会員の交流促進のための「つどい」をひらきたいと考えています。

時期、場所もふくめて、どんな会合にするか、鋭意企画中です。どうかご期待ください。

■会員の募集

海外と文化を交流する会は、すでに40周年をすぎました。ここまで、ずっと続いてきたのは、会員の皆さまのバックアップがあるからです。御礼申し上げます。

会としてさらにボランティアでの有意義な活動をしていきたい、そんな願いをこめて、常に企画を検討しています。

幸いに良質な会員の方々ばかりです。さらなる発展を期待し、新会員をご推薦ください。自薦の場合でも、理事会で面接いたします。事務局までファクスあるいはe-mailでお問い合わせください。

■会費納入のお願い

2011年度の年会費納入をお願いいたします。さらに2010年度2009年度の年会費未納の方は、ぜひともご納入ください。高く評価されている当会の活動は、皆さまのご支援あってこそなのです。

将来、日豪両国の芸術専攻生の教育交流にも発展させたいと考えています。オーストラリアやニュージーランドに寄贈した日本画の里帰り展も実現したいと思っております。ぜひご支援ください。

郵便振替 00130-2-366249 社団法人海外と文化を交流する会

銀行振込 三菱東京UFJ銀行渋谷支店(普) 2266599 海外と文化を交流する会

会費 10,000円(正会員) 5,000円(特別賛助会員) 3,000円(学生会員)

海外と文化を交流する会事務局
〒151-0053 東京都渋谷区代々木1-27-6 パイビル内
TEL&FAX 03-3370-7654 e-mail:jimukyoku@kaigai-bunka.org
<http://www.kaigai-bunka.org>